

旺文社文庫

山の音

(他) 末期の眼

川端康成著



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやすくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

赤尾好夫

〔編集顧問〕
(五十音順)

伊藤 整 茅 誠司 木村 毅
塩田 良平 中島 健蔵 森戸 辰男

旺文社文庫 山の音 他一編 200 円



昭和 42 年 10 月 10 日 初版発行

昭和 43 年 11 月 1 日 重版発行

著 者 川 端 康 成
発行者 鳥 居 正 博
印刷所 株式会社 文 弘 社

発 行 所 株式会社 旺 文 社

162 東京都新宿区横寺町

電話 東京 (03) 269-2111〔代〕

610 - 63

10A62-9-6,0(10,8)

© 旺文社 1967

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

落丁・乱丁・不良本はお取り替えます
書店または本社に直接お申し出ください

(中村印刷・清水印刷・市川製本)

旺文社文庫

山の音

(他) 末期の眼

川端康成

旺文社

目次

山の音

五

末期の眼まごめ

三三

解説

村松剛たけし

三四

一、「山の音」解題

三四

二、「末期の眼」解題

三五

三、作品鑑賞

三六

映画「山の音」を担当して

三七

川端康成との交遊

水木洋子みずきようこ
中河与一なかがわよいち

三七

代表作品解題

三七

参考文献

三八

年譜

三八

挿絵

鷹山宇一

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこな
わない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

山の音

山の音

一

尾形信吾は少し眉を寄せ、少し口をあけて、なにか考えているふうだった。他人には、考えていると見えないかもしれぬ。悲しんでいるように見える。

息子の修一は気づいていたが、いつものことで気にはかけなかった。

息子には、父がなにか考えていると言うよりも、もっと正確にわかっていた。なにかを思い出そうとしているのだ。

父は帽子を脱いで、右指につまんだまま膝においた。修一はだまってその帽子を取ると、電車の荷物棚にのせた。

「ええっと、ほら……。」

こういう時、信吾は言葉も出にくい。

「このあいだ帰った女中、なんと言ったっけな。」

「加代ですか。」

「ああ、加代だ。いつ帰ったっけ？」

「先週の木曜ですから、五日前ですね。」

家にいただろう。」

「そうです。」

修一はなれているので、いっこう父に同情を示さない。

信吾自身にとっては、なれてはいても、やはり軽い恐怖であった。加代をいくら思い出そうとしても、はつきり浮かんでこない。このような頭の空しいあせりは、感傷につかまってやわらぐこともあった。

今もそうで、信吾は加代が玄関に両手をついていたように思われる。そのまま少し乗り出す形になって、

「おずれでございますね。」と言ったように思われる。

加代という女中は半年ばかりいて、この玄関の見送り一つで、やっと記憶にとまるのかと考えると、信吾は失われてゆく人生を感じるかのようであった。

二

信吾の妻の保子^{やすこ}は一つ年上の六十三である。

一男一女がある。姉の房子^{ふさこ}には女の子が二人^{ふたり}できている。

保子は割に若く見えた。年上の妻とは思われない。信吾がそう老^おけているわけではなく、一般の例にしたがって、妻が下と思われるまでだが、不自然でなくそう見えた。小づくりながら岩^{がんじょう}乗で、達者なせいもある。

保子は美人ではないし、若い時はもちろん年上に見えたから、保子のほうでいっしょに出歩くのを嫌きらったものだ。

それが何歳ごろから、夫が年上で妻が年下という常識で見て無理がなくなったのか、信吾は考えてみてもよくわからない。五十半ばを過ぎてからと見当はつく。女のほうが早く老ふけるはずだが、逆になった。

還暦かんれきの去年、信吾は少し血を吐いた。肺かららしいが、念入りの診察も受けず、改ようじようまった養生もせず、その後故障はなかった。

これで老衰したわけではない。むしろ皮膚などはきれいになった。半月ほど寝ていた時も、目や唇くちびるの色が若返ったようだった。

信吾は既往に結核の自覚症状はなかった。六十で初めて咯血かくけつというのは、いかにも陰惨いんさんな気がするので、医者いしやの診察を避けたところもあった。修一は老人の頑冥がんめいとしたが、信吾にしてみるとそうではなかった。

保子は達者なせいとかよく眠る。信吾は夜なかに保子のいびきで目がさめたのかと思うことがある。保子は十五六のころいびきの癖くせがあつて、親は矯正ききようせいに苦心したそうだが、結婚でとまった。それがまた五十過ぎて出てきた。

信吾は保子の鼻をつまんで振るようにする。まだとまらない時は、咽のどをつかまえてゆすぶる。それはきげんのいい時で、きげんの悪い時は、長年つれ添ともってきた肉体に老醜ろうしゆうを感じる。

今夜もきげんの悪いほうで、信吾は電灯をつけると、保子の顔を横目で見ていた。咽をつかまえて

てゆすぶった。少し汗ばんでいた。

はつきり手を出して妻の体からだに触れるのは、もういびきをとめる時くらいかと、信吾は思うと、底の抜けたようなあわれみを感じた。

枕まくらもとの雑誌を拾ったが、むし暑いので起き出して、雨戸を一枚あけた。そこにしゃがんだ。月夜だった。

菊子のワン・ピイスが雨戸の外にぶらさがっていた。だらりといやな薄白い色だ。洗濯物せんたくものの取り入れを忘れたのかと信吾は見たが、汗ばんだのを夜露にあてているのかもしれない。

「ぎゃあつ、ぎゃあつ、ぎゃあつ。」と聞こえる鳴き声が庭でした。左手の桜の幹の蟬せみである。蟬がこんな不気味ぶきみな声を出すかと疑ったが、蟬なのだ。

蟬も悪夢に怯おそえることがあるのだろうか。

蟬が飛びこんできて、蚊帳かやの裾すそにとまった。

信吾はその蟬をつかんだが、鳴かなかった。

「おしだ。」と信吾はつぶやいた。ぎゃあつと言った蟬とはちがう。

また明りをまちがえて飛びこんでこないように、信吾は力いっぱい、左手の桜の高みへ向けて、その蟬を投げた。手答えがなかった。

雨戸につかまって、桜の木の方を見ていた。蟬がとまったのか、とまらなかったのかわからない。月の夜が深いように思われる。深さが横向けに遠くへ感じられるのだ。

八月の十日前だが、虫が鳴いている。

木の葉から木の葉へ夜露の落ちるらしい音も聞こえる。

そうして、ふと信吾に山の音が聞こえた。

風はない。月は満月に近く明るい、しめっぽい夜気で、小山の上を描く木々の輪郭はぼやけている。しかし風に動いてはいない。

信吾のいる廊下の下のしだの葉も動いていない。

鎌倉のいわゆる谷の奥で、波が聞こえる夜もあるから、信吾は海の音かと疑ったが、やはり山の音だった。

遠い風の音に似ているが、地鳴りとでもいう深い底力があつた。自分の頭のなかに聞こえるようでもあるので、信吾は耳鳴りかと思って、頭を振ってみた。

音はやんだ。

音がやんだあとで、信吾ははじめて恐怖におそわれた。死期を告知されたのではないかと寒けがした。

風の音か、海の音か、耳鳴りかと、信吾は冷静に考えたつもりだったが、そんな音などしなかったのではないかと思われた。しかし確かに山の音は聞こえていた。

魔が通りかかって山を鳴らしていったかのようにあつた。

急な勾配なのが、水気をふくんだ夜色のために、山の前面は暗い壁のように立って見えた。信吾の家の庭におさまるほどの小山だから、壁と言っても、卵形を半分に切つて立てたように見える。

(1) 鎌倉市の、丘陵にかこまれた谷地を「やと」「やつ」とよぶ。ここでは二階堂付近か。

その横やうしろにも小山があるが、鳴ったのは信吾の家の裏山らしかった。

頂上の木々のあいだから、星がいくつか透けて見えた。

信吾は雨戸をしめながら、妙なことを思い出した。

十日ほど前、新築の待合で客を待っていた。客は来ないし、芸者も一人だけ来ていて、あとの一人か二人かはおくれた。

「ネクタイをお取りなさいよ、暑苦しいわ。」と芸者が言った。

「うん。」

信吾は芸者がネクタイをほどくのにかかせておいた。

なじみというわけではないが、芸者はネクタイを、床の間の脇にある信吾の上着のポケットへ入れてきてから、身の上話をはじめた。

二月あまり前に、芸者はこの待合を建てた大工と、心中しかかったのだそうである。しかし青酸加里を呑む時になって、この分量で確かに工合いよく死ぬるのかという疑いが、芸者をとらえた。

「まちがいのない致死量だと、その人は言うんですの。その証拠に、こうして一服ずつ別々に包んであるじゃないか。ちゃんと盛ってあるんだ。」

しかし信じられない。疑うと疑いが強まるばかりだ。

「だれが盛ってくれたの？ あんたと女とをこらしめに苦しませるように、分量を加減してあるかもしれないわ。どこの医者か薬屋かがくれたのとたずねても、それは言えない。だって、おかしいでしょう。二人とも死んでしまうのに、どうして言えないのかしら。あとでわかるはずがないでし

よう。」

「落語かい。」と信吾は言いそうだったが、言わなかった。

私がだれかに薬の分量を計ってもらってから、やり直しましょうと、芸者は言い張った。

「ここにそのまま持ってますわよ。」

怪しい話だと信吾は思った。この待合を建てた大工^{だいく}というのだけが、耳に残った。

芸者は紙入れから薬の包みを出して、開いて見せた。

「ふうん。」と言ってながめただけだった。それが青酸^{せいさん}加里^{かり}かなにかも、信吾にはわからなかった。

雨戸をしめながら、その芸者を思い出したのだ。

信吾は寢床にはいったが、山の音を聞いたというような恐怖について、六十三の妻を起こして話
はできなかった。

三

修一は信吾と同じ会社について、父の記憶係りのような役もつとめていた。

保子はもちろん、修一の嫁の菊子^{きくこ}も、信吾の記憶係りの役目を分担していた。家族三人がかりで
信吾の記憶をおぎなっていた。

会社で信吾の部屋^{へや}つきの女事務員も、また信吾の記憶を助けていた。

修一が信吾の部屋^{へや}へはいつてきて、片隅^{かたすみ}の小さい書棚^{しょだな}からなにか一冊抜き出すと、ばらばらペー
ジをくっていたが、

「おやおや。」と言いながら、女事務員の机へ行つて、開いたページを見せた。

「なんだね。」と信吾は少し笑いながら言った。

修一はページを開いたまま持ってきた。

——ここでは貞操観念が失われているのではない。男は一人の女性を愛しつづける苦しさ、女が一人の男を愛する苦しさに堪えられず、どちらも楽しく、より長く相手を愛しつづけ得られるために、相互に愛人以外の男女を探すという手段。つまり互いの中心を堅固にする方法として……。

そんなことが書いてあった。

「ここってどこだい。」と信吾は聞いた。

「パリですよ。小説家の欧州紀行です。」

信吾の頭は警句や逆説に対してはや鈍くなっていた。しかし、警句でも逆説でもなく、立派な洞察のようにも思えた。

修一はこの言葉に感銘したわけではあるまい。会社の帰りに女事務員をつれ出そうと、す早くしめしあわせたのにちがいがなかった。そう信吾はかぎつけた。

鎌倉の駅におりると、信吾は修一と帰りの時間を打ち合わせるか、修一よりおそく帰るかすればよかったと思った。

東京帰りの群れでバスもこんでいるし、信吾は歩いた。

さかな屋の前に立ちどまってのぞくと、亭主にあいさつされたので、店先へ寄っていった。車海老を入れた桶の水は薄白くよどんでいる。信吾は伊勢海老を指先でつついてみた。生きているのだ。